解放

発行所　赤砦社
東京都台東区松が谷
4－24－14
シティオーソネ21　602号
電話03（3847）9535

本号　300円

「解放」再刊にあたっての革命的労働者協会の決意

万国の労働者団結せよ！

革命的労働者協会（解放派）

五月二―三日以降、ハザマとその私兵グループによる解放派総体に対する「分裂」＝組織破壊が強行された。そしてハザマ私兵グループは、六月四日、われわれの指導的同志への暗殺を狙った襲撃、六月十二日、明大襲撃にうって出、七月二日の長田打倒に驚愕・恐怖し、七月二十一日、同志中山虐殺、七月二十三日、明大自治会の非公認を明大資本に泣訴しての明大和泉キャンパスへの武装登場と反革命への道を転がり落ちている。

このハザマ私兵グループによる「分裂」＝組織破壊の中で、本社占拠と機関紙発行体制の破壊が行われ、「分裂」＝組織破壊の手段として、また階級闘争総体の破壊のために機関紙「解放」が悪用されてきた。革命的労働者協会（解放派）は、このことを自己批判し、日帝足下階級闘争―労働者階級のもっとも最先頭で闘いぬく革命党の機関紙としての「解放」を再刊する。同時にこれは、ハザマ私兵グループによる「分裂」＝組織破壊による階級闘争そのものに対する打撃―破壊の克服の闘いの一環でもある。すべての労働者人民がこの闘いに注目されると同時に、現下の日帝国家権力解体―朝鮮反革命戦争粉砕の闘いにともに決起されることを訴える。

まさしく世界恐慌の深化情勢下で日帝国家権力が朝鮮反革命戦争に突撃していく中で、「ガイドライン」関連法案をはじめとする戦争法案、社会総領域でファッショ的改編を推し進める反革命諸立法が推進され、「二〇〇〇年平行滑走路完成」攻撃を引き継ぐ「二〇〇二年暫定滑走路完成」攻撃が三里塚闘争にかけられ、狭山第二次再審が棄却され、二〇〇〇年天皇訪韓―沖縄サミットという一大決戦を控えた中で、いやだからこそ、これらとの闘いから逃亡＝路線転換をはかるためにこそハザマ私兵グループの「分裂」＝組織破壊が行われたのである。われわれは、日帝国家権力との闘いをすべての労働者人民によびかけ、その最先頭で闘いぬくことを表明してきた。それだけに、このような全労働者人民に対する裏切りを許すわけにはいかないし、このような部分を解放派の中から生み出した責任において、このような腐敗分子を階級闘争から絶滅することを誓い、同時に、階級闘争の最前線で死力をつくしてたたかいぬくことを誓う。七・二一同志中山虐殺報復戦に総力決起せよ。

「分裂」の性格と組織破壊の経過

今回のハザマ私兵グループによる陰謀的「分裂」＝組織破壊は、五月二日―三日の非公然組織の破壊から開始された。ハザマ私兵グループは、「五・二六弾圧公判」で「明大ゴスペル証人に対してヤジも飛ばさないのなら獄中被告と連帯したことにならない」、「明大ゴスペルが、明大に登場してもこれと闘うことはできない。ファシストとも反革命革マルとも闘えなくなる」、「明大ゴ

スペルが授業を受けることを許容するような自治会なら、そんな自治会は潰れてもかまわない」として非公然組織で組織化に入り、非公然組織の破壊に手を染めたのだ。ハザマ私兵グループは、これに失敗するなかで、五月四日―五日のクーデター的党本部占拠を行い、その上で五・二六弾圧公判での「公判方針」―「ゴスペルとのボス交」を口実に「分裂」＝組織破壊を強行していったのだ。

想起して欲しい。この五・二―三組織破壊策動は、革命軍が三里塚空港中枢直撃の四・二七戦闘を闘い抜いているまさにその背後で準備されていたのだということを。そればかりか、ハザマ私兵グループは、この四・二七戦闘を簒奪しようと最後まで試みていた。ハザマ私兵グループの六・一三集会のステッカーのメイン・スローガンが「四・二七戦闘断固支持」であり、革命軍の戦闘詳報のでた七・四三里塚闘争のその日まで「四・二七戦闘」を騒ぎ回っていたのだ。その後の沈黙は、いったい何なのか。下部はともかく、ハザマ私兵グループの「指導部」がそれを知らなかったはずもない。とにかく、事実が明らかになるまでは、自分たちのグループ構成員もだますというのがハザマ私兵グループの手法なのだ。この事実のなかに今回のハザマ私兵グループによる「分裂」＝組織破壊の本質が示されている。このことは、同じ六・一三集会のステッカーのメイン・スローガンの「一〇・一八戦闘（注―金圭東打倒戦闘のこと）断固支持」についてもまったく同じである。そもそも、そのような事実はないとずっと強弁し続けてきながら、今になって五・二―三はこうであったと意志一致しなおしているのは何故なのか。この事実のなかに今回のハザマ私兵グループによる「分裂」＝組織破壊の本質が示されている。

こういった手法の上に、ハザマ私兵グループは、六月四日にわれわれの指導的同志に対して反革命暗殺襲撃を仕掛け、六月十二日にはわれわれの拠点―明治大学への襲撃を仕掛けてきた。いずれもその意図（暗殺・大量テロ）が失敗したのは、その能力もないのに軍事をもてあそんだ結果であり、またわれわれの事前の対処による。実際、六・四襲撃では、はじめから頭部のみを狙い、それがかなわなくなり、かつ目撃された段階で足を狙い始めたという事実がある。これらの襲撃は、六・一三反安保集会で自らの劣勢が明らかになることを覆いかくそうとする意図からくるものであり、この集団の自暴自棄によるものであると同時に、ハザマ自身の今回の「分裂」＝組織破壊への意識性による。ハザマ自身は、六・四以前から、「『T内T』＝『TT』」（「党内闘争」＝「党派闘争」）と今回の「分裂」＝組織破壊を規定していたのであり、そもそも五・二―三の過程と並行して複数の指導的同志の暗殺をたくらんでいたのである。七・二一同志中山虐殺は、このハザマの直接の意志によるものである。ハザマは、同志中山を「攪乱分子」（＝スパイ）と規定し、わざわざ名前をあげて虐殺を指示してきていたのだ。

こういった経過自体が、彼らのいう「分裂」（＝組織破壊）の口実であった五・二六弾圧公判をめぐる数々のデマ・ペテンを打ち砕くものであるのだが、そればかりでなくその後の五・二六弾圧公判の状況が彼らの意図が何であったのかを示している。彼らは、七月六日の公判では、彼らの唯一の「公判方針」であった野次さえ飛ばせず、それどころか動員数がゴスペルを下回り、逆に公判延をゴスペルに制圧されるという体たらくとなっている。ハザマ私兵グループは、「ゴスペル解体・一掃」もやる気などなく（実際、ビラ等でもこれは消えている）、ただただ「分裂」（＝組織破壊）のためだけに五・二六弾圧公判を利用したのである。

その上で、狭山再審棄却への取り組みや七月十八日の宇都宮病院糾弾闘争への取り組み等が、ハザマ私兵グループの「分裂」＝組織破壊のための階級闘争破壊の手法を明らかにしている。「分裂」＝組織破壊のためにはどのようなデマやペテンでも使い（七月十三日の狭山再審棄却糾弾の解放同盟集会へのわれわれの登場を阻止するために、わずか数名で会場入り口で挑発的情宣行動を行ない、宇都宮病院闘争破壊のためには「『障害者』襲撃」というデマさえでっち上げた）、大衆闘争―階級闘争破壊のために躍起となっているのである。[redacted]に至っては、六・四反革命襲撃の直前に「日韓連帯闘争はやらない」「やる気もない」と公言している。このような内容だからこそ、あのような形での六・四反革命襲撃を敢行できたのである。ハザマ私兵グループは、運動の推進など

一切考えておらず階級闘争への寄生をもくろみ、大衆闘争―階級闘争の廃墟の上に自らの延命を考えているだけなのである。そしてその手段は、テロと陰謀である。だからこそ、七月二十二日に、宇都宮病院糾弾闘争や狭山闘争を越える動員で、破壊のための破壊を目的とした明大和泉キャンパスへの登場が可能だったのである。ハザマ私兵グループの「機関紙」をどう読んでも、この登場の「目的」が何だったのか、理解できる人間はいまい。それはそうである。危機感と焦りにかられて、明大自治会破壊のために総力動員し、それが破産したなどと書けるはずもない。

これらは、ハザマ私兵グループを構成する「（歴史的）指導部」なるものが、本質的に階級闘争に寄生し階級闘争を規制することによって延命しようとしてきた存在であることによる。六・二〇弾圧と『治安フォーラム』で「明白な形でこれを取り除く」と名指しされたことに縮みあがったハザマは、自らの病気治療と自らの「警護」のための私的組織の維持のために党を改編しようとしたのであり、[redacted]は、安保・新「ガイドライン」関連法案の衆議院通過という緊迫した情勢のなかでわれわれにヘゲモニーをうばわれることを恐れ、ペテンを弄してまでも安保・新「ガイドライン」関連法案粉砕決戦の爆発を最後までおしつぶそうとしたのである。いかにこのことを隠蔽しようとしても、具体的階級闘争の現場での闘いへの取り組みがこれを明らかにするのだ。

七月二日の長田完全打倒は、これらの経過の必然的結果である。

今回の解放派の「分裂」という事態そのものは、確かに痛苦なものとしてある。しかし、このようなハザマ私兵グループ「指導部」のような腐敗した部分に革命党の指導部を占拠されることを防ぎ、革命党総体の破壊、路線転換を防ぎえたという点では決定的な意義をもっている。われわれは、解放派の歴史的闘いを継承し、権力への路線転換を拒否し、プロレタリア世界革命へむけ進撃する革命党の建設を推進する。

ハザマ私兵グループの「声明」の腐敗

ハザマ私兵グループが七月十五日付けの「機関紙」に発表した「追悼声明」は、彼らの腐敗の極を示している。そもそも、今回の自ら行ってきた「分裂」＝組織破壊の"成果"である六・四反革命襲撃、六・一二明大襲撃について一言も触れていない。このこと自身が、自らの道義性のなさを示しているのである。六・一二明大襲撃の失敗に至っては、下部におろすことさえしていないではないか。しかしだからと言って、六・四にあたって、長田が「解放派の底力をおもいしったか」とはしゃぎまわり拠点明大の攪乱を策謀し、六・一二にあたって[redacted]が「これで（六・一三が）一人へったな」という電話をかけてきている事実を消すことなどできはしないのだ。今に至るも、六・四反革命の事実過程を偽り、六・一二明大襲撃を下部に下ろしていないのは何故なのか。六・四反革命と六・一二明大襲撃を七・二長田打倒と必死になって切り離そうとしているのは何故なのか。これこそが、ハザマ私兵グループ「指導部」の腐敗の本質を示しているのだ。

長田を「生産労働者」「運動途上」といったり、「当日も七・四三里塚現地への決起を準備しつつ明大五・二六被弾圧被告の防衛のために奔走していた」と平気で矛盾していることを書くようなのが、ハザマ私兵グループである。さらに「非公然・非合法部門の解体であり、公然・合法部門による非公然・非合法部門の従属化と双方の腐敗」と書き、その上で「山田・土肥」と新たに「土肥」という名前を出している。この「土肥」とは、反革命革マルが、「革命軍の責任者」としてきた名前であり、権力もそう目している名前ではないのか。これは、長田完全打倒が「非公然・非合法部門」によると彼らが判断し、「党内闘争」に「非公然・非合法部門」がでてくるのはルール違反だという懸鳴をハザマの私兵グループがあげているということである。またハザマの私兵グループが、「非公然・非合法部門」がわれわれを支持していることを関わず語りに認めているものである。ハザマ私兵グループがなにをどう判断しようと、それはハザマ私兵グループの判断である。だが、そもそも今回の「分裂」＝組織破壊は、五・二―三非公然部門の破壊から開始されたのだ。その上での、ハザマの「『T内

T』＝『TT』」基調による六・四反革命、六・一二明大襲撃の凶行である。これほど勝手きわまる言い分はあるまい。自分たちが何を言っているのかすらわかっていないのではないか。その上で、六・四を「制裁」とか「足を（も）狙った」とかいえば、暗殺（未遂）を糊塗できると考えているなら甘いといわねばなるまい。六・四暗殺が未遂に終わったのは、単にハザマ私兵グループの「軍事」が小ブル的もてあそびによることと、目撃をおそれてのことからではないか。

そもそも、ハザマ自身がどのような文書を出し、陰謀主義「中枢」においてどのような謀議が行われているのか。あらわれた事態だけでも判断できる部分は多い。同志中山虐殺を「手引き者」などと、七・二の結果―「報復」と言いくるめようとしても無駄である。ハザマの文書自身が最初から同志中山虐殺を公言していたのであり、それを知らぬといってもいまさら通用しはしないのだ。七・二一同志中山虐殺襲撃は、当初からハザマの「解体プラン」のなかに予定されていたのであり、それを七・二長田打倒を口実にハザマ私兵グループ総体に意志一致して凶行したのである。その意味で、七・二一同志中山虐殺は、ハザマ私兵グループのグループ総体としての反革命への転落を刻印する第一の指標である。

ハザマ私兵グループによる権力・革マルへの投降＝路線転換を貫徹するための「分裂」＝組織破壊

今回の「分裂」＝組織破壊は、六・二〇弾圧と『治安フォーラム』で「明白な形でこれを取り除く」と名指しされたハザマと、これと結託した「革労協中央」を名乗る陰謀主義集団が、権力・革マルに投降＝路線転換をはかったことによるものである。このことは、いかにとりつくろおうとしても、大衆闘争―階級闘争に対するハザマ私兵グループのかかわり方をみれば明らかである。

また、ハザマ私兵グループが六・四反革命の「理由づけ」とした六・一三付けの「声明」をみても明らかである。この中で「分裂」の直接的原因とした五・二六弾圧公判の現状がどうなっているのか。これは、すでに述べたとおりである。その「隠された」「性格」としてあげた「綱領・戦略（路線）」の代表としてあげられている「内乱―コミューン」が、「分裂」直後のハザマ私兵グループの「機関紙」の一面論文では意識的に削り落とされているのは何故なのか。要するに、これらはまさしく「ためにする理由」であって、本音は別のところにあったことを示している。

ハザマは、要するに自分の延命―病気治療のためだけに金を出す組織に革命党を変質させ、権力・革マルに「休戦」＝命乞いをしようとすることをくわだてたのではなかったか。それ以外のハザマに付き従う「中央指導部」は、二〇〇〇年天皇訪韓のなかで激化するであろう天皇主義右翼ファシストとの血戦にすくみあがり、これ幸いとばかり路線転換に走ったのではなったのか。ハザマは、これに絶対にくみしない同志たちの暗殺さえ謀ったのではないのか。そのために、非公然組織の破壊に走ったのではなかったのか。

ハザマ私兵グループは、「公然合法主義的・大衆闘争主義」とわれわれを批判しているのであるが、では「土肥」という名前はどこから出てきたのか。これは、彼らのこの言葉の破産を示すものではないのか。そもそもこの言葉自身、大衆闘争を階級闘争として責任を持つということからの逃亡を自認したということではないのか。

このハザマ私兵グループの権力・革マルへの投降を示すものは、このハザマ私兵グループと完全に一致した内容での革マルの六・一八の明大和泉校舎への登場である。この間反革命革マルは、一貫して反革命通信上で「ハザマ」の名をあげず、文中で傍点つきの「狭間」という用語を使用することによってハザマの「休戦」＝投降をうけいれることを示した。その上でハザマ私兵グループの内容をそのままうけいれての明大登場である。そして、ハザマ私兵グループは、この革マルと完全に気脈を通じて明大学生運動破壊に走っているのである。ハザマ私兵グループが主張してきた宇都宮病院闘争や、狭山第二次再審棄却をめぐる動員をこえる総力での明大自治会破壊のためだけの明大和泉キャンパスへの登場は、ハザマの「『T内T』＝『TT』」路線がどのようなものかを端的に示している。七月二十二日のハザマ私兵グループの総力を投入

しての明大和泉登場とその破産は、それ自体が、反革命革マルと意識的に一体化して拠点明大の破壊のためだけに蹶起となっていることを示しているのだ。七・二一―七・二二という一連の事態は、ハザマ私兵グループが、大衆闘争―階級闘争に対して一切の責任をとらないというだけではなく、その破壊のみをこととする反革命としてあらわれつつあることを示している。

このこと自体が、痛苦な事態である。明大学生運動をはじめ、三里塚闘争、「障害者」解放闘争、部落解放闘争、反弾圧戦線等々、解放派の「分裂」という一事だけで打撃を被る部署は多い。ところが、その上にハザマ私兵グループによる意識的な大衆闘争―階級闘争破壊が進められているのである。このことからの防衛、克服のために、われわれは総力で闘い抜かねばならない。このことなしには、階級闘争の前進もありえない状況となっている。われわれは意識的な階級闘争破壊をおこなうハザマ私兵グループの解体・絶滅を、解放派の中からこのような醜悪きわまりない部分を生み出した責任において貫徹することをすべての労働者人民に明らかにする。

反弾圧戦線に対する破壊策動と七・二二明大自治会破壊策動

この間、ハザマ私兵グループは、破壊のための破壊を目的とした策動をあらゆる大衆闘争―階級闘争全般に仕掛けてきた。その最たるものが、「[redacted]法律事務所気付」の「明大学生会中央執行委員会委員長・副委員長」名の「声明」である。この反革命革マルと見まがうばかりの「声明」は、明大当局に明大学生自治会の非公認を迫り、明大学生運動の破壊―解体を策するものである。当然にもこの「声明」に対して、明治大学学生会中央執行委員会はこの二名の解任で対応した。この「声明」なるものが直接二名の手になるものでないことは明らかであるが、二名の抗議の意思の表明がない以上、この二名の「合意」のうえで出されていると考えざるを得ない。この場合に、「[redacted]法律事務所」の責任はいかなるものとしてあるのか。

五・二六弾圧公判の方針をめぐって、三弁護士が出した「弁護団声明」が事実に反することは、事実関係のなかで明らかにしてきたしこれからも明らかにしていく。また、「襲撃」なる見解にも反論してきたし反論し続ける。しかし、この二名の「声明」への関与―明大学生運動破壊に関しては、まったく次元の異なることではないのか。この事実自体がこれまでの「弁護団声明」の本来の内容を示しているのではないのか。その上で三弁護士は、「弁護士襲撃をやる人間に救援を受ける資格はない」とまで強弁しているのである。このような行為によっていったいだれが直接の利益をうるのか。

「[redacted]法律事務所」は、結局のところ七・二二ハザマ私兵グループの明大和泉登場―襲撃・明大学生運動破壊の水先案内人の役割を果たしたということである。七・二二明大登場の唯一の根拠がこの二名の「声明」であり、当日もこの「声明」をまいているのである。そして、この七・二二明大登場が、七・二一同志中山虐殺と一体のものであるのは明白である。つまり、「[redacted]法律事務所」は、七・二一の責任もとるということか。

「[redacted]法律事務所」の責任はそれ自身として問うとしても、ハザマ私兵グループ、とりわけ青華社による反弾圧戦線への破壊策動は、破壊のための破壊として、すべてを廃墟としていく内容で展開されている。今回の二名の「声明」もそういった類いのものである。この「声明」が明治大学評議員会―明大資本そのものに送り付けられている点に注意しなければならない。結局のところハザマ私兵グループは、明大学生運動破壊を資本に泣きつくしかなかったのであり、そこに彼らの本質があらわれている。その上で明大学生運動破壊を策しておいて、三七名が逮捕―三六名が起訴されたからといって、その悪行自体が消えるわけではないのだ。後は、「反弾圧」というようなものではないのだ。ハザマ私兵グループは、「弾圧」されたということをもって、「権力」からの「認知」を主張しているが、実際は絶対に権力に「弾圧」されないという確信があったからこそ、あのような形態での明大和泉キャンパスへの登場を策したのではないのか。路線転換＝投降を明らかにしているのだから、革マルと同様、権力からは「弾圧」されることはないと考えていたことは明らかである。明大資本に明大学生運動破壊を泣きつく以

上、「弾圧」を考えもしなかったことは当然である。このことからも、ハザマ私兵グループの意図は明らかではないか。明大学生運動の破壊を陰謀し、そのことによって自らの路線転換を隠蔽する、そして、明大学生運動破壊の一点で反革命革マルと"手打ち"が行える、これがハザマとその私兵グループの薄汚い意図だったのではないのか。すでにのべたことだが、ハザマ私兵グループは明大登場の具体的獲得目標をなんら明らかにしていない。「情宣」だったのか「追悼」だったのか、そんなことを誰が信じるものか。ただただ、その意図をあからさまに警くことは、さすがにまずいと判断しているのだろう。これを反革命行為といわずに、何と言うのか。しかし権力は、ハザマ私兵グループの意図を許すよりは、われわれを含んで一斉逮捕を策動する方が得策として構えただけのことあり、ハザマ私兵グループには、その程度の権力への警戒心もなかったということである。ハザマ私兵グループは、この権力の意図に忠実に従っただけである。これが、ハザマ私兵グループの本質だということである。この七・二二ほどハザマ私兵グループの反革命転落を示す指標はない。

このような七・二二明大登場と同様の行為が、反弾圧戦線のみならず、すべての大衆運動―階級闘争の局面で行われているのである。われわれは、このようなことを決して許しはしない。ハザマ私兵グループが、「分裂」にまったく道義性をもたず、政治的道義性なき軍事的冒険主義に六・四反革命、六・一二明大襲撃をもって踏み込み、七・二一同志中山虐殺と七・二二明大への反革命武装登場をもって反革命への転落を刻印した以上、七・二一同志中山虐殺に嵐の報復戦をたたきつけることを水路に、一切の躊躇を振り捨て、一切の制限を取り払い、軍事的せん滅戦を基軸とする闘いによってできうる限り短期間にハザマ私兵グループを解体・絶滅する。このことは、階級闘争をたたかうものの責務として宣言しておく。

ハザマ私兵グループを解体・絶滅し、反革命革マルを殲滅し、ファシストを撃滅し、朝鮮反革命戦争粉砕、小渕政府打倒へ進撃する。プロレタリア世界革命へともに進撃しよう。

七・二一同志中山虐殺に報復を！

8・21同志中山追悼集会を開催

七・二一反革命に報復を宣言

八月二十一日明治大学において、同志中山追悼集会が開催された。

午後六時半、革労協の同志の司会により、黙祷を行ない集会が開催される。まず、革命軍、最前線で闘う労働者ほか、集会に寄せられたメッセージを司会が代読する。同志中山虐殺に報復を宣言する革命軍の烈々たる決意が全参加者の拍手で受け止められる。

続いて、集会の主催者である革命的労働者協会から基調提起が行われた。「七・二一同志中山虐殺に報復し、七・二一―二二をもって反革命に転落したハザマ私兵グループを解体・絶滅せよ」という基調が参加者の拍手で確認される。

続いて、参加した諸団体・諸個人からの追悼の発言が行われる。全障連東北ブロックで闘う仲間、全障連関東ブロックで闘う仲間、全障連関西ブロックで闘う仲間、徳島大学で闘う「障害者」の仲間、三里塚を闘う「障害者」解放委員会、反安保労研全国センターの仲間、全国反戦、全学連からの発言が、それぞれ同志中山の思い出を語り、同志中山の遺志を引継ぎ、七・二一反革命に報復しハザマ私兵グループを解体・絶滅する決意を表明する。同志たちの怒りは深く、決意は固い。

これらの諸同志の決意を全体で確認し、シュプレヒコールとインターナショナルの斉唱で集会を終えた。

八・二一同志中山追悼集会は、同志中山のプロレタリア革命への遺志を引継ぎ、七・二一反革命への報復を宣言する集会として闘いとられたのだ。七・二一―七・二二をもって反革命へと転落したハザマ私兵グループを同志中山虐殺報復戦の嵐のなかで解体・絶滅せよ。

ハザマ私兵グループを解体・絶滅せよ